

國學院大學學術情報リポジトリ

井上ひさしの一葉像に関する生成学的考察：
『頭痛肩こり樋口一葉』の「前テキスト」を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崔, 雪婷 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001612

井上ひさしの一葉像に関する生成学的考察

—『頭痛肩こり樋口一葉』の「前テキスト」を中心に—

Establishing of Ichiyō Higuchi's Image Written by Hisashi INOUE:
Focusing on *Zutsuu katakori Higuchi Ichiyō* According to the Avant-texte

崔 雪 婷

キーワード：井上ひさし 『頭痛肩こり樋口一葉』 前テキスト 生成 創作意図
关键词：井上厦 《头痛肩疼的樋口一叶》 草稿 生成 创作意图

要旨

戯曲作品『頭痛肩こり樋口一葉』は、1984年に初めて上演された井上ひさしの人気作であり、井上ひさし主宰のこまつ座の旗揚げ作である。テキストの生成過程において、井上ひさしは様々な試みをして、いくつかの「前テキスト」が残っている。

本稿は、①『なんだ坂 あんな坂』という題名がつけられている一葉の評伝劇、②「らい病」に苦悩している一葉のイメージに焦点を当てる評伝劇、③題名はつけられていないが、冒頭に「頭痛肩こり救世軍(救痛軍)本営」と書いた現代の女性たちが一葉の評伝劇を演じる劇中劇、④破棄した生原稿が出版されたもう一つの『頭痛肩こり樋口一葉』、そして、⑤決定稿『頭痛肩こり樋口一葉』を考察に入れ、「前テキスト」と決定稿の相違点及び関連性を明らかにする上で、井上ひさしの思考の流れにしたがって、生成学の観点から、井上ひさしの一葉像を考察する。さらに、1980年代の社会背景のもとに、井上ひさしがなぜ樋口一葉を主人公にして選んだか、また、一葉の評伝劇を通して何を伝えているか、というような創作意図に関する問題を解決することを目指している。

摘要

戏剧作品《头痛肩疼的樋口一叶》于1984年首次公演，是井上厦的人气作品，也是他本人主办剧团小松座上演的第一部作品。在戏剧脚本生成的过程中，井上厦进行了诸多尝试，留下了与定稿并不相同的“前文本”。

本文的研究对象为以下5个版本。①题目为《什么样的坡，那样的坡》的樋口一叶评传剧，②塑造对麻风病感到苦恼的樋口一叶形象的评传剧，③没有题目，只在最前面写了“头痛肩疼救世军(救痛军)大本营”，以现代女性在剧中排练樋口一叶评传剧的“剧中剧”，④公演前一个月放弃创作，其后将手稿出版的“另一个《头痛肩疼的樋口一叶》”，⑤定稿《头痛肩疼的樋口一叶》。在明确“前文本”与定稿的差异与关联性的基础上，追随井上厦构思的轨迹，从生成学的视点，对井上厦塑造的樋口一叶形象进行考察，以期明确其创作意图。

はじめに

現代劇作家である井上ひさし（1934-2010）の戯曲作品『頭痛肩こり樋口一葉』は、1984年にこまつ座の旗揚げ作として初めて上演された。『頭痛肩こり樋口一葉』は井上ひさしの人気作として、出版された脚本に基づく研究及び上演に関する劇評が多かった。しかし、『頭痛肩こり樋口一葉』の生成過程については、まだ研究されていない。

実は、『頭痛肩こり樋口一葉』に関するいくつかのバージョンの「前テキスト」が残っている。「前テキスト」とは、「初出以降のテキストの誕生に先立って書かれたもの（構想メモ、下書き、清書原稿、校正刷り等々）の総称である。」⁽¹⁾『頭痛肩こり樋口一葉』の「前テキスト」としてのそれらの原稿に、井上ひさしの膨大な思想が載せられている。先行研究のほとんどは、決定稿によって作品の主旨を解釈するのだが、実際に「前テキスト」の存在は、決定稿の成立経緯を示すだけでなく、作家の創作意図を理解する上での非常に重要な資料である。

樋口一葉の評伝劇を書こうとする井上ひさしは、いったいどのように一葉像を築き上げたか。筆者が調べている限りでは、井上ひさしが『頭痛肩こり樋口一葉』を執筆していた時期の身近な人の記録と、現存の構想メモや草稿などによって、「前テキスト」には四つのバージョンがある。つまり、決定稿を含めて、井上ひさしの思考の流れにしたがって、それぞれ①『なんだ坂 あんな坂』という題名がつけられている一葉の評伝劇、②「らい病」に苦悩している一葉のイメージに焦点を当てる評伝劇、③題名はつけられていないが、冒頭に「頭痛肩こり救世軍（救済軍）本営」と書いた現代の女性たちが一葉の評伝劇を演じる劇中劇、④破棄した生原稿が出版されたもう一つの『頭痛肩こり樋口一葉』、⑤決定稿『頭痛肩こり樋口一葉』、という五つのバージョンがある。また、香野百合子と渡辺美佐子、白都真理、上月晃、風間舞子、そして新橋耐子という六人の女優は最初に決められたため、井上ひさしは執筆中、登場人物が六人の女性であることを前提としたと考えられる。

また、「樋口一葉」を題材にすることは最初に決められたのだが、井上ひさしが創作した一葉の評伝劇の五つのバージョンは、内容的には、実際にそれぞれの焦

(1) 松澤和宏『生成論の探究』（名古屋大学出版会、2003年）P28

点や特徴がある。構造的には、草稿の残らない①と②の最初の二つのバージョンについて考察することはできないが、草稿が残される③と④の二つのバージョンは決定稿と違って、劇中劇というメカニズムが採用されたということがわかる。

これから、筆者は『頭痛肩こり樋口一葉』の「前テキスト」を中心に、井上ひさしの一葉像を巡って、生成学という視座から、考察を試みる。「生成論は、何よりもまずテキストの生成過程の物質的な痕跡である草稿などを前＝テキストとして構築し、その可能な限り客観的な記述を通して生成過程の復元を図ることを目指している」⁽²⁾という。「前テキスト」によって、井上ひさしの思考の跡をたどりながら、「前テキスト」と決定稿との相違点や関連性について検討することを通して、『頭痛肩こり樋口一葉』の生成過程を明らかにすることは、井上ひさしの創作意図に迫るもっとも有効的な経路であろう。さらに、作品の生成によって、井上ひさしの作品のみ上演するこまつ座の旗揚げ作の主人公に、なぜ樋口一葉が選ばれたか、また、井上ひさしは『頭痛肩こり樋口一葉』を通して、何を伝えているのかというような問題を解決することを目指している。

一、テキストのない構想

こまつ座の旗揚げ作としての『頭痛肩こり樋口一葉』の創作過程について、前妻の西館好子の記録が残っている。

「第一稿では明治という時代に、女性が筆一本で暮らしを立てることがいかに至難の業か、近代の黎明期にあって、武士の娘である一葉が日本の近代化と戦うという内容だった。」⁽³⁾また、こまつ座旗揚げ公演の題材が「樋口一葉」と決まった後、井上ひさしは最初に『なんだ坂 あんな坂』を演題にするつもりであったことも、西館好子の記録からわかる。画家の安野光雅に頼んで、「真紅の下地に坂道と荷を背負う一葉の後ろ姿」⁽⁴⁾が描かれたポスターを作ったが、厳しい坂で一葉の人生を象徴する視点から創作する第一稿は結局進まなかったという。

『なんだ坂 あんな坂』という題名は、童謡作曲家である本居長世(1885-1945)

(2) 松澤和宏「生成論と解釈学—『感情教育』の冒頭「ついに船が出た」をめぐる—」『名古屋大学グローバルCOEプログラム 第2回国際研究集会報告書』pp:143-155(2007年)P143

(3) 西館好子『表裏井上ひさし協奏曲』(牧野出版、2011年)P282

(4) 西館好子『表裏井上ひさし協奏曲』(牧野出版、2011年)pp:281-282

が1927年に作曲・作詞した代表作「汽車ぼっぼ」から取られたと考えられる。劇作家として活躍する井上ひさしが、宇野誠一郎とコンビを組み、劇中歌を創作していたことはよく知られているが、張立波氏(2012)は、井上ひさしの、流行歌を劇中歌として活用する芸術手法を指摘しており、演劇の音楽性を通して気軽な雰囲気を作ると同時に、歌詞を通してストーリーを進めているとまとめた⁽⁵⁾。「お山の中行く 汽車ぼっぼ/ぼっぼ ぼっぼ 黒い煙を出し/しゅしゅしゅしゅ 白い湯気ふいて/機関車と機関車が 前引き 後押し/なんだ坂 こんな坂/なんだ坂 こんな坂(傍点筆者)/トンネル鉄橋 ぼっぼ ぼっぼ/トンネル鉄橋 しゅしゅしゅしゅ/トンネル鉄橋 トンネル鉄橋/トンネル トンネル/トン トン トンと のぼり行く」という歌詞に明るいメロディーを合わせた、今でも子どもに歌われている作品である。「汽車ぼっぼ」は箱根の山を汽車が駆け上がっていく様子を描写している⁽⁶⁾と言われて、トンネルや鉄道の着工はまさに「日本の近代化」の象徴として描かれたのだ。

つまり、その「坂」は、明治五年(1972年)に旧士族の娘として生まれ、日本の近代化による新しい時代の要求に適応してゆこうとする樋口一葉の人生を暗示する一方で、生活習慣や制度、思想が一新されていく日本の近代社会で働く、女の歩みを示している。第一稿の原稿は残っていないが、「坂」という表象で、近代日本女性の生き方を描くのは、井上ひさしが一葉の評伝劇を創作する発想の原点として捉えられるだろう。

「第二稿では膨大な日記の中からたった一行見つけた“忌まわしき事件で数日頭痛をする”という箇所から想像し、一葉は実は『らい病』に苦悩していたのではないかという構想をつくる。」⁽⁷⁾しかし、西館好子に「結核でもらい病でも、一葉にとって同じじゃなかったのかしら」⁽⁸⁾と言われたことで、「プロットは目の前で破かれ、ちりちりにちぎられて、私の前で花吹雪になった」⁽⁹⁾という結末に至った。一葉の評伝劇の第二稿は原稿が残らず、井上ひさしに破棄された。

(5) 張立波「試論日本作家井上厦の劇作特色」『作家雑誌』pp:119-120 (2012年No.3) P120

(6) 「鉄道のまち守れ、町が駅スタッフ 神奈川・山北、無人駅化に奮起」(朝日新聞・夕刊、2012年5月26日)

(7) 西館好子『表裏井上ひさし協奏曲』(牧野出版、2011年) P282

(8) 西館好子『表裏井上ひさし協奏曲』(牧野出版、2011年) P282

(9) 西館好子『表裏井上ひさし協奏曲』(牧野出版、2011年) P282

事実として、樋口一葉は「らい病」の患者ではなかった。それでは、なぜ井上ひさしは「らい病」に苦悩している一葉像を構想していたのだろうか。

一葉の身近な人において、従兄の樋口幸作はハンセン病でなくなったという説がある。明治二十七年（1894年）七月一日の一葉日記に「(前略) 十時頃成けん、さくらぎぢやう つかひきた かうさくしきよ ほう は、ぎみきやうがく たごち まる 櫻木丁より使來り、幸作死去の報あり。母君驚愕、直に參らる。からはその日寺に送りて、日ぐらしの烟とたちのぼらせぬ。淺ましき終を、ちかき人にみる、わがみ すくせ 我身の宿世もそゞろにかなし」⁽¹⁰⁾と書いてある。当時幸作が治療を受けていた「桜木病院」⁽¹¹⁾は、東京の上野桜木町にある山梨出身の同郷人の丸茂文良と妻のむねが経営する外科と皮膚科の丸茂病院であった。そして、丸茂むねに関する研究において、樋口一葉と幸作のことが言及されたことがある。「むねと樋口一葉との関係は、一葉の血縁である叔父⁽¹²⁾の樋口幸作がハンセン病であり、一葉は、夫文良に感染に関して相談しており、文良死後もむねにより其の病について聞かされていたという。この幸作事件が一葉に最も短期間に傑れた小説を書かせた要素とも考えられている。」⁽¹³⁾という。つまり、樋口一葉は幸作の急死に大きな衝撃を受け、自分の人生も儚いものだと考えた。幸作の死が、井上ひさしが「らい病」に苦悩している一葉像を構想した出典と考えられるだろう。

現代医学からみる「らい病」は、一般的にハンセン病といわれ、慢性感染症として、早期発見・早期治療を受けたら、治癒できる病であるが、日本では、「らい病」は昔ながらのイメージが残っている。「ハンセン病差別の大きな要因となった仏教経典として引き合いに出される。(中略)ハンセン病は現世、前世の悪い行いに対する業罰によって生じる病気であり、後々まで祟るという意味であることは間違いなく、古代以来、普賢菩薩勸発品は、ハンセン病の劫罰観こうびょう・業病観に大きな影響を与えた」⁽¹⁴⁾という。江戸時代に入ると、「『癩』が『業病』として強調されるのもこのころで、『癩』患者の存在は『家』全体の恥とみなされた。『業病』^{てんけい}『天刑

(10) 樋口一葉、塩田良平・和田芳恵編『一葉全集 第四巻』(筑摩書房、1954年) P153

(11) 樋口一葉、塩田良平・和田芳恵編『一葉全集 第四巻』(筑摩書房、1954年) P152

(12) ここは誤りである。樋口幸作は、樋口一葉の父の則義の弟樋口喜作の次男である。つまり、幸作は一葉の「叔父」ではなく、「従兄」である。

(13) 志村俊郎・唐澤信安・殿崎正明・山本鼎・幸野健・寺本明「女医丸茂むねの一生と明治期の女子医学生達の教育」『第113回 日本医史学会総会 一般演題』(2012年6月) P167

(14) 福西征子『語り継がれた偏見と差別——歴史のなかのハンセン病』(昭和堂、2017年) pp.14-15

『^{びょう}病』であるという見方は庶民の間で定着した」⁽¹⁵⁾という。近代に入ると、一葉が生きていた明治期から、昭和二十年代まで、ハンセン病に対する認識は、「家族や一族内に多くの患者が発症する現象を、ハンセン病には、遺伝的にかかりやすい体質（体質遺伝）があるかのような家筋、血筋の概念も強化され、患者のみならず、患者家族も厳しい差別の被害を受けるようになった」⁽¹⁶⁾というより厳しい状況になった。「らい病」という呼び方は日本で差別的に感じられており、「特效薬のなかった戦前、体が朽ち果てるように進行する病は、世間から恐れられ、『らい（癩）病』『らい』と呼ばれ、忌み嫌われた。」⁽¹⁷⁾

また、幸田露伴は1890年に「対鬪牒」を発表したのだが、その小説はまさに、当時の人々のハンセン病に対する認識に基づいて書かれていた。「対鬪牒」から、「幽霊が登場する怪奇小説では、ハンセン病が社会に対する脅威や社会変化に対する人々の恐怖や不安のメタファーとなっていたことがわかる」⁽¹⁸⁾という。仏教に精通しており、露伴から大きな影響を受けて小説「うもれ木」（1892年）を発表した一葉は、ハンセン病に対して、確かに朦朧としたイメージを持っていたはずである。

つまり、肺結核で若くして亡くなったと知られている樋口一葉には、「らい病」とのつながりがなかなか見られないが、日本における「らい病」のメタファーを明らかにした上で、新たに一葉の評伝の道を切り開こうとする井上ひさしの創作趣向が窺える。「らい病」と絡められたであろう要素は、樋口一葉の「死生観」及び「家族観」の二つだと考えられる。「らい病」に苦悩している一葉像から窺える「死生観」と「家族観」は、後述する決定稿『頭痛肩こり樋口一葉』においても、もっとも重要な主題である。

総じていえば、第一稿と第二稿のテキストは残っていないが、西館好子の記録によって、井上ひさしの最初の考え方がわかる。実在の人物である樋口一葉を巡って、井上ひさしは評伝劇に明治時代の女性の生き方及び樋口一葉の「死生観」と「家族観」を書き込むのを構想していた。そして、この最初の構想は実際に

(15) 畑谷史代『差別とハンセン病 「柎の垣根」は今も』（平凡社、2006年）P165

(16) 福西征子『語り継がれた偏見と差別——歴史のなかのハンセン病』（昭和堂、2017年）P30

(17) 畑谷史代『差別とハンセン病 「柎の垣根」は今も』（平凡社、2006年）pp:12-13

(18) 田中キャサリン「怪奇小説におけるハンセン病の肖像——幸田露伴『対鬪牒』を中心に』『大手前大学論集』pp:89-124（2015年第16号）P119

決定稿にも生かされている。

二、演題のない構想メモ：劇中劇「頭痛肩こり救世軍（救痛軍）本営」

仙台文学館に保存されている原稿資料において、演題のない改稿がある。冒頭に「頭痛肩こり救世軍（救痛軍）本営」と書かれた二枚のメモから、井上ひさしが現代で一葉の評伝劇を上演するというような劇中劇を構想していたことがわかる。

六人の女性という構成は最初から決まっていたため、決定稿の役者構成と結びつけて考えると、「頭痛肩こり中将（渡辺美佐子）一樋口多喜」「頭痛肩こり大尉（香野百合子）・捨て子。戸主一樋口夏子」「頭痛肩こり少尉（白都真理）・飛おり未遂一樋口邦子」「頭痛肩こり伍長（新橋耐子）刑務所出所一花螢」「頭痛肩こり上等兵（上月晃）一稲葉鑛」「頭痛肩こり新兵（風間舞子）・なんとなく一中野八重」という構図がわかる。彼女たちは、救世軍として、「純潔月間」という街頭活動を行っている。それは、「歯を喰いしばって純潔を守り抜き、いくつもの名作をのこした薄幸の女流作家の一生を上演。入場料は只。ただし御寄付はご自由です。行進。」⁽¹⁹⁾ という、劇中に樋口一葉の評伝劇を上演する劇中劇である。

第一に、一葉の評伝の部分を見ると、井上ひさしは一葉の真実の生涯における「萩の舎内弟子一三宅花園」「小説で生計を」「菊坂町一半井桃水」「お鉈」「下谷龍泉寺町」「一葉が龍泉寺で計画しかけていたこと」「久佐賀義孝訪問」「母親と一葉と国子との問題」「売り喰ひ」「内職」「借金」「歌門をひらく」などという伝記的事実の断片をメモした。また、井上ひさしは「純潔を守り抜いた」「頭痛肩こり」「一葉がやろうとしてやれなかったこと」「人を救ふという幻想をうちはらう」などに重点を置こうとしたことがわかる。さらに、香野百合子が演じる「お座なりの一葉伝」と風間舞子が演じる「新しい一葉伝」が劇中の劇として考えられている。このような構成と構想は、後述する上演の直前に破棄されたもう一つの『頭痛肩こり樋口一葉』の原稿でもよく窺われる。

(19) 『井上ひさし資料特集展vol.2～「頭痛肩こり樋口一葉」』（編集・発行：仙台文学館、2013年1月）P14

第二に、『頭痛肩こり樋口一葉』の生成過程の中で唯一現代を背景とするバージョンとして、こまつ座の旗揚げ作を作ろうとする意図が窺える。

- Ⓐ 月給九万円。うち毎月三、四万円を故郷へ仕送り。爪に火を点して十万円やっとなめる。家から『電気冷蔵庫がこわれたから何とか』……。どこまでもついてくる家に絶望。富国生命ビル。29F。地上百二十メートルから飛び降りようとする。下に救世軍もどき。なかなかどいてくれない。文句を云いに降りて……。『おなかを一杯にしてからもう一度考へたら?』といわれ……。
- Ⓑ 亭主の女出入りで、ツイカーッとなって相手の女に瀕死の重傷をおわせて懲役一年六ヶ月。親戚兄弟みなみはなす。ひとりぼっちになってしまったと覚悟して出所。迎えに出てくれていたのは、この救世軍もどき。ありがたかった。
- Ⓒ この伝導所の前に捨てられていたそうです。司令官がひろって育ててくれました。
- Ⓓ⁽²⁰⁾

構想メモによるメンバー紹介は以上の通りである。登場人物Aは、飛び降り未遂の頭痛肩こり少尉（白都真理）であり、家庭の生計を背負って苦しみ、自殺願望を持っている女性である。登場人物Bは、刑務所出所の頭痛肩こり伍長（新橋耐子）であり、夫の浮気により家庭崩壊し、苦しむ女性である。登場人物Cは、頭痛肩こり大尉（香野百合子）であり、捨て子である。井上ひさしの構想を表すメモは、登場人物Dにとどまっており、現代の女性たちの物語と一葉の評伝劇の展開が未知数になってしまったが、劇中、一葉役を演じる登場人物は一人のみに限られないという点から見れば、井上ひさしは女性を主人公とする群像劇を作ろうとしていたと考えられる。つまり、劇中劇というメカニズムを採用しようとした井上ひさしは、劇中で一葉の評伝劇を演じる、不幸な人生を送る現代の女性たちを通して、時代を超える一葉の精神力を観客に戦略的に伝えたかったの

(20) 『井上ひさし資料特集展 vol2～「頭痛肩こり樋口一葉」』（編集・発行：仙台文学館、2013年1月）P14

だろう。

井上ひさしはかつて、今村忠純氏との対談中に、こまつ座が成立した当時の思いを下記のように述べている。

スローガンのようなものが三つできました。第一、劇団員は食べて行かなくてはならない。第二、外部の才能たち（演出家をはじめとするスタッフ、俳優さんたちキャスト）のためのよき働き口にならねばならない。第三に、舞台作品の一つとして現代社会の一部分にならねばならない。（傍点筆者）そしてこの三つのスローガンを満足させるにはとにかくいい作品を創ること、それしかない。⁽²¹⁾

江戸、明治、大正、昭和の名人らを主人公とした評伝劇を数多く書いた井上ひさしは、「舞台作品の一つとして現代社会の一部分にならねばならない」⁽²²⁾ というように、舞台作品を演じる時代と観客が生きている現代とを結びつけることで、現代人を共感させようとした。

登場人物Aの原型は、実際の現代女性である。1983年12月24日の毎日新聞（朝刊）社会版の新聞で、昨日の「二十三日午後一時半ごろ、東京千代田区内幸町二の二の二、日比谷シティの富国生命ビル（二十九階）西側の広場の植え込みの中に女性の白骨死体があるのを手入れをしていた（中略）田口甫さん（フエ）が見つけ、丸の内署に届け出した」⁽²³⁾ という事件が報じられた。調べによると、富国生命ビルから飛び降りた20歳の小松原緑は、「九月二十一日ごと、『仕事が合わない』との書き置きを残し、一度会社の寮からいなくなり、その後いったん寮に戻ったものの、同月二十六日、『死にたい』との書き置きを残し、再び行方不明になっていた」⁽²⁴⁾ という。後に明らかとなったこととしては、以下の通りである。

緑さんは秋田市の母子家庭に育ち、高校卒業後上京、一年間バスガイドを

(21) 井上ひさし・今村忠純「こまつ座二十五周年」『悲劇喜劇』pp:8-23（2009年12月）P9

(22) 井上ひさし・今村忠純「こまつ座二十五周年」『悲劇喜劇』pp:8-23（2009年12月）P9

(23) 「オフィス街に白骨女性 飛び降り 上半身、盛り土に」（毎日新聞・朝刊、1983年12月24日、14版・社会）

(24) 「オフィス街に白骨女性 飛び降り 上半身、盛り土に」（毎日新聞・朝刊、1983年12月24日、14版・社会）

した後、アルバイトで現在の会社に入り、半年前に正社員となる。毎月手取り七、八万円の収入のうち三、四万円を母と弟の実家に送金。九月二十一日、自殺を考えての最初の失跡後にもどった彼女に社員寮の人たちがスパゲティや焼き肉をごちそうすると「こんなごちそう初めて」と喜んだという。上京以来、夜の外出はしたことはなく、寮でもめん類ばかりの食事で、誰にも打ち明けられなかった。九月二十五日、気分を変えたらとカーテンを買いに初めて近所のスーパーへ連れていかれた。が六千円という値で買わず、友人に予備のカーテン布をプレゼントされ、それにレースをつけて飾った。その翌日、二度目の失踪。部屋には「色々ご親切に頂きました。でももうこれ以上生きて行く気力がありません」との書き置きと額面十万円の定期預金通帳が残された。病気などの不時に備え、絶対に取っておきなさいとアドバイスされた預金で、その直後実家からは新しく電気冷蔵庫を買う金が欲しいといわれた金でもあった。遺体がしっかり抱いていたバッグには十円玉二十一枚。⁽²⁵⁾

現実には自殺を選んだ小松原緑は、劇中の登場人物Aとして、「樋口一葉伝」から、生きていく力をもらえたことだろう。井上ひさしにとって、樋口一葉は近代を生きた女性だが、彼女の人生は現代女性との接点を持っている。井上ひさしは、この改稿で初めて劇中劇という奇抜な発想を用い、舞台作品で一葉が生きている時代を現代と巧みに結びつけようとした。つまり、女性の自立が尚の事難しかった明治時代に、貧困の中で家族を養うために女流職業作家の道を切り開いた樋口一葉像を通して、現代の女性の生き方に示唆を与えるという井上ひさしの創作意図が読み取れる。

後の決定稿による上演に関する「全感想ハガキ1592通」に、「(前略)うらみ、つらみをこえた幽霊たちの明るさ、私達の来世もあんな風であったらと考えました。(志木市本町・小林智慧子・看護婦・57歳)」⁽²⁶⁾、そして、「ずっと笑っていましたが、後で涙が出ました。私もなんとか世間を気にせず生活したいのですが……頑張りたいと思っています。(千葉市川戸町・桑畑由紀子・公務員・40歳)」⁽²⁷⁾

(25) 西井一夫編『昭和史全記録』(毎日新聞社、1989年) P1148

(26) こまつ座『the座 2号 ユートピア』(小学館、1984年) P55

(27) こまつ座『the座 2号 ユートピア』(小学館、1984年) P56

という2通を例にして考えると、井上ひさしはこの構想メモのバージョンを通して現代の人々に伝えようとする目的を遂げた。つまり、時代を超える一葉像の明るさは観客に伝わってきた。

三、破棄稿：もう一つの『頭痛肩こり樋口一葉』

『頭痛肩こり樋口一葉』におけるいくつかの「前テキスト」の中で最も知られているのは、十二枚の生原稿が発表された「もう一つの『頭痛肩こり樋口一葉』」である。本作は、筋立て、登場人物の造形、素性が書かれた構想メモも公開されている。これは、公演初日の約一ヵ月前に「最後の、最後で劇構造の基本に致命的な欠陥」⁽²⁸⁾が発見され、「涙をのんで放棄」⁽²⁹⁾されたバージョンと言われている。

構造的には、前述のバージョンと同じような劇中劇である。設定場面は、樋口一葉が亡くなった五年後、明治三十四年（1901年）の盂蘭盆の七月十六日の午後遅くから夜半までである。登場人物は決定稿と同じように、六人の女性のみだが、創作ノートに登場する女性たちはそれぞれ、家作持ちで樋口家に女中奉公に上がったことのある多田ステ（42歳）と、捨て子だったがステに拾われ、彼女の娘として育った多田すみれ（18歳）、そして、店子である元遊女の四人——樋口一葉と同じ年に生まれた坂井フク（30歳）、近藤さと（23歳）、小林ハツ（22歳）、俗名不詳、年齢不明の謎の女の花蛸である。店子たちは自由廃業を阻止しようとする男性たちへテロルを行うことを計画するとともに、樋口一葉の評伝劇『樋口一葉伝』を稽古する。

わたしの尊敬している女流小説家があります。この女の生き方をわが生き方にしたいと思って、その女のことを拾った芝居……。樋口一葉という女の一生を芝居に仕組みました。⁽³⁰⁾

この改稿は最終的に未完成となってしまったが、上記の台詞から見れば、創作ノートの行間に読み取れる井上ひさしの一葉像は尊敬すべき人物像であり、女の

(28) 井上ひさし・こまつ座編『樋口一葉に聞く』（文春文庫、2003年）P70

(29) 井上ひさし・こまつ座編『樋口一葉に聞く』（文春文庫、2003年）P42

(30) 井上ひさし・こまつ座編『樋口一葉に聞く』（文春文庫、2003年）P49

生き方に示唆を与える女性像だと考えられる。

さらに、樋口一葉と男性との関係、特に、半井桃水や久佐賀義孝との関係について、決定稿では直接的には描写されていないが、創作ノートではそれが中心的に書かれているように感じられる。一葉像の成立を巡って、井上ひさしの実家にある遅筆堂文庫に保存されている『一葉全集』における井上ひさしの行間の書き込みを見てみると、桃水との交際に関する日記の多くに、付箋を貼り付けたり、マークしたりしている。

なお、創作ノートの生原稿には、劇中で上演される一葉の評伝劇の演題は元々『頭痛肩こり樋口一葉』と書いてあったが、井上ひさしは自ら「頭痛肩こり」という五文字を削って、最後に「伝」を加えて、『樋口一葉伝』⁽³¹⁾と名付けた。そのため、生原稿に残っている「頭痛肩こり」に関する描写は、一箇所のみである。それは「痛むお頭に膏葉貼って凝った肩には荷物を担ぎ、今日も仕入れに樋口一葉、貧乏坂のぼって母子坂くだって、恋の坂のぼって、文學坂くだって」⁽³²⁾という劇中劇に出ていない女たち（フク、ハツ、すみれ）のコーラスの歌詞である。この歌詞から、井上ひさしがここに、第一稿『なんだ坂 あんな坂』の要素も織り交ぜようとしていたことがわかる。さらに、貧乏、家庭、恋愛、就職問題から逃れられない女たちの生き方を巡る創作趣向から、前述の演題のない構想メモ・劇中劇「頭痛肩こり救世軍（救痛軍）本営」との連続性も窺える。

破棄されたもう一つの『頭痛肩こり樋口一葉』において、女性の生き方を巡る様々な問題を取り上げようとしていたことが明らかとなった。井上ひさしがなぜ、一葉の評伝劇で、現代女性にも影響を与える女の生き方というテーマに焦点を当てたのか考えてみると、当時の社会背景に影響されたのかもしれない。1980年代は、ちょうど日本のフェミニズム運動における第三次主婦論争の時期に当たるのである。

樋口一葉が生きていた明治時代は、「内助の功」と位置付けられていた女性たちが、教育や婚姻などの様々な面で閉塞状況に直面しており、女の生き方は「男尊女卑」を唱える男権社会に抑圧されていたが、それと同時に、この時代は女性地位の転形期でもあった。欧米の文明開化と日本従来の伝統がすり合わさり、「一

(31) 井上ひさし・こまつ座編『樋口一葉に聞く』（文春文庫、2003年）P53

(32) 井上ひさし・こまつ座編『樋口一葉に聞く』（文春文庫、2003年）P64

八八〇年代はじめの自由民権運動抑圧の余波としての男女同権論への攻撃や、その後の反欧化主義の台頭による欧米風の女子教育への批判といった動きのたびごとに《伝統》の比重を増しつつ、一九〇〇年代の良妻賢母的教育体制の確立へと解消されていったといえる」⁽³³⁾時代であった。

1910年代に『青鞥』が成立すると、日本の第一次フェミニズム運動が始まった。「戦後の新憲法と民法改正により、第一次フェミニズム運動の具体的な要求であった公民権、参政権、教育の機会、法制上の妻の地位の平等は一挙に実現したかのようにみえた」⁽³⁴⁾と認められている。後の第二次フェミニズム運動には、主として性別役割分業の視点から、家庭における妻の地位向上や母親としての社会参加をめぐる問題が検討されていた。第三次主婦論争は、高度成長期以降、主婦の労働者化の完成を前提として、1972年に『婦人公論』に掲載された武田京子氏の論文「主婦こそ解放された人間像」⁽³⁵⁾がトリガーとされている。武田氏は『生産』より「生活」に価値をおくという主婦の理論を、男性も働く女性も巻き込んで押し広げていくことが、そのためには、まず第一になされねばならない」と主張しており、女の生き方の多角的様相を求めはじめた。

このような社会背景を踏まえた上で、第三次主婦論争の余波に乗って、井上ひさしは、自立する女性像としての一葉のイメージを通して、女は男の附属品ではないという主張を強く訴えようとしたのだろう。このような一葉像は、従来の薄幸の才媛というイメージと異なり、逆に明るいイメージとなっている。このような従来と違う明るい一葉像は、決定稿にも見られる。

そして、今村忠純氏は劇中劇における物語の発展について、「劇中劇の解体していく過程で、劇は花螢が仇敵のステをつきとめ、さらに自由廃業の元娼婦たちとステの対決へとシフトしていく、というのがおそらく第一稿のプロットであったのにもちがいない」⁽³⁶⁾と指摘した。今日まで、井上ひさしが公開したこの創作ノートを破棄した原因は明らかになっていないが、誰かの口を借りて、一葉の評伝を語る構造は、破棄稿以外に、後述する決定稿の『頭痛肩こり樋口一葉』における幽霊の花螢という登場人物の役割からも窺える。

(33) 平田由美『女性表現の明治史——樋口一葉以前』（岩波書店、2011年）P39

(34) 西川裕子『近代国家と家族モデル』（吉川弘文館、2000年）P81

(35) 武田京子「主婦こそ解放された人間像」『婦人公論』pp:52-59（1972年4月）

(36) 今村忠純『頭痛肩こり樋口一葉』小論『悲劇喜劇』pp:13-16（2006年12月）pp:15-16

四、決定稿：『頭痛肩こり樋口一葉』

決定稿には、「頭痛肩こり」という病症を明治の女の特徴として演題に取り上げた。演題の成立過程を考えると、井上ひさしは第二稿執筆時には既に、一葉の日記に頻繁に書かれている「頭痛」に注目していた。つまり、「病的」一葉像は最後に急遽決まったのではなく、逆に、それは井上ひさしの一葉像の出発点だったと考えられる。

前述の破棄稿は、戸主・作家としての一葉の生涯に触れながらも、主としては樋口一葉の恋愛を巡って語っていることがわかる。しかし、何度も改稿した井上ひさしは、決定稿では一葉の恋愛について直接的には書いていない。「一葉は、とてもわかりにくい人です。とくに半井桃水との関係、渋谷三郎との関係、占い師で相場師の久佐賀義孝との関係など、女としての生き方を書こうとすると、こんな難しい人はおりません。」⁽³⁷⁾ また、「『女・一葉』という線で追っていくとわからなくなってしまうのです。(中略)今度は親子という線で追っていきますと、はじめて何か見え出しました。(後略)」⁽³⁸⁾ という創作策略を告白した。

決定稿『頭痛肩こり樋口一葉』における一葉像はどのようなイメージで作り出されたかという点、拙稿「井上ひさしの作品における一葉像——『頭痛肩こり樋口一葉』を中心に」⁽³⁹⁾で詳しく分析したため、ここでは贅言を省略しようと思う。総じていえば、井上ひさしの一葉像は、常に戸主としての責任が自分の双肩に掛かっている上に、薄命だが、作家になるという理想を抱く、明るい女性である。この新たな一葉像は、従来の薄幸な一葉像と大きく異なる。

なお、前述において、第三次主婦論争という社会背景を提示したが、井上ひさしが描いた自立した明るい一葉像は、フェミニズムのイメージを持たない点について説明しておきたい。

従来、一葉を「薄幸の才女」として見た場合も、フェミニズム的存在である、物書きの女の自立性を強調する女性として見た場合も、一葉像における抑圧される女性のイメージが強調されてきた。女性の社会進出が強く呼びかけられた80

(37) 井上ひさし.こまつ座編『樋口一葉に聞く』(文春文庫、2003年) pp:221-222

(38) 井上ひさし.こまつ座編『樋口一葉に聞く』(文春文庫、2003年) P222

(39) 崔雪婷「井上ひさしの作品における一葉像——『頭痛肩こり樋口一葉』を中心に」『東アジア文化研究』pp:103-121 (2019年2月)

年代半ばからは、樋口一葉はフェミニズムを代表する女性の一人だというイメージがますます強くなり、数多くの日本人にそのように認識されることとなる。特に、2004年に一葉が五千円札の顔に選ばれたが、他の候補者としての平塚雷鳥と与謝野晶子、津田梅子は皆、女性解放政策を積極的に進めた女性として日本社会に認められる有名人である。そのため、恐らく、2004年に彼女らと並列された樋口一葉もまたフェミニズムの先駆者だと、自然と認識されてしまったのであろう。しかし、以上のような観点は樋口一葉が職業作家の道へと進んだ最大の要因を無視した。つまり、井上ひさしが戸主としての夏子に焦点を当てたように、一葉は女性解放や個人の自己実現のためというよりも、戸主として家族を養う責任を負う立場で、苦しい家計を支えるために作家となったことを忘れてはいけない。そのような意味で、少なくとも文壇に登場した最初の頃は、フェミニズムを意識していなかったと考えられる。

要するに、井上ひさしの筆の下では、樋口一葉は、単なる「薄幸の才女」でもなければ、進歩的な女性の先駆者というフェミニストでもなく、内面に葛藤を持ちながらも夢を抱く明るい「人間」として描かれた。これによって、『頭痛肩こり樋口一葉』に描かれている樋口一葉は、明治時代から私達の生きる現代へとやってきたといえよう。

おわりに

本稿は評伝劇『頭痛肩こり樋口一葉』の「前テキスト」に基づいて、生成学の観点から、井上ひさしの一葉像を考察してきた。

第一稿の『なんだ坂 あんな坂』では、樋口一葉を日本の近代化と戦う女性像と捉えて、明治時代の女性の生き方を書こうとした井上ひさしの最初の考え方が見て取れた。第二稿では、井上ひさしが「らい病」に苦悩する一葉像を作り出そうとしたことによって、評伝劇に樋口一葉の「死生観」と「家族観」を書き込むといった変化が窺われた。冒頭に「頭痛肩こり救世軍(救痛軍)本営」と書いた構想メモでは、一葉の評伝劇を通して、明治時代への影響を明らかにするだけでなく、現代社会への示唆を求める創作意図が明らかとなった。もう一つの『頭痛肩こり樋口一葉』は、劇中劇の構造を借りており、「前テキスト」における完成度が比較的高いバージョンである。劇中劇において、誰かの口で一葉のことを語ると

いう形は、破棄稿における登場人物の中で唯一花菱が決定稿に生かされていることから、劇中劇的構造が決定稿にも引き継がれていることがわかる。最後に、「女の生き方」という大きな主題の下、決定稿以前の様々な試みを基に、『頭痛肩こり樋口一葉』が作り出された。

戯曲作品『頭痛肩こり樋口一葉』の生成過程を見てみると、まず、評伝劇の主題が大きくなっていることが窺える。主に一葉自身を巡る様々な悩みを通して、一葉個人をテーマに構想された第一稿と第二稿に対して、後の改稿の構想は全て明治時代の女性及び現代の女性の生き方に関わる趣向へと広がっていった。また、評伝劇の主題の広がりとともに、『頭痛肩こり樋口一葉』は樋口一葉という一人の女性の評伝劇に留まらず、女の群像劇になってきたともいえる。女性らを悩ませる問題は、樋口一葉という主人公から他の登場人物へと分散し、明治時代の女性の全ての生き方を一つの舞台に集約させるようになった。つまり、井上ひさしは樋口一葉を明治時代の女性の中の一人として見て、評伝の対象範囲を他の登場人物へと広げる手法を用いることで、一葉像の明るさを強めてきたことがわかる。

実は、決定稿『頭痛肩こり樋口一葉』には、いくつかの清書原稿が残っている。決定稿の成立経緯についても、細かく考察する必要があるが、紙幅の都合で、今後の課題とさせていただこうと思う。

参考文献

<テキスト及び研究著書>

- [1] 井上ひさし『頭痛肩こり樋口一葉』（集英社文庫、1988年）
- [2] 井上ひさし・こまつ座編『樋口一葉に聞く』（文春文庫、2003年）
- [3] 『井上ひさし資料特集展vol.2～「頭痛肩こり樋口一葉」』（編集・発行：仙台文学館、2013年1月）
- [4] 樋口一葉、塩田良平・和田芳恵編『一葉全集 第四巻』（筑摩書房、1954年）
- [5] 西館好子『表裏井上ひさし協奏曲』（牧野出版、2011年）
- [6] 松澤和宏『生成論の探究』（名古屋大学出版会、2003年）
- [7] 福西征子『語り継がれた偏見と差別——歴史のなかのハンセン病』（昭和堂、2017年）
- [8] 畑谷史代『差別とハンセン病 「^{ひいらぎ}終の垣根」は今も』（平凡社、2006年）
- [9] 西井一夫編『昭和史全記録』（毎日新聞社、1989年）
- [10] 日本近代文学館『近代文学草稿・原稿研究事典』（八木書店、2015年）
- [11] 平田由美『女性表現の明治史——樋口一葉以前』（岩波書店、2011年）
- [12] 西川裕子『近代国家と家族モデル』（吉川弘文館、2000年）

- [13] 上野千鶴子編『主婦論争を読むⅠ全記録』(勁草書房、1982年)
- [14] 上野千鶴子編『主婦論争を読むⅡ全記録』(勁草書房、1982年)
- [15] 『頭痛肩こり樋口一葉』プログラム(企画:こまつ座 製作:東宝/こまつ座, 2016年8月)
- [16] こまつ座『the座 2号 ユートピア』(小学館、1984年)

<論文及び新聞>

- [1] 松澤和宏「生成論と解釈学—『感情教育』の冒頭「ついに船が出た」をめぐって—」『名古屋大学グローバルCOEプログラム 第2回国際研究集会報告書』pp:143-155 (2007年)
- [2] 張立波「试论日本作家井上厦的剧作特色」『作家杂志』pp:119-120 (2012年No.3)
- [3] 志村俊郎・唐澤信安・殿崎正明・山本鼎・幸野健・寺本明「女医丸茂むねの一生と明治期の女子医学生達の教育」『第113回 日本医史学会総会 一般演題』(2012年6月)
- [4] 田中キャサリン「怪奇小説におけるハンセン病の肖像——幸田露伴『対髑髏』を中心に」『大手前大学論集』pp:89-124 (2015年第16号)
- [5] 井上ひさし・今村忠純「こまつ座二十五周年」『悲劇喜劇』pp:8-23 (2009年12月)
- [6] 今村忠純「『頭痛肩こり樋口一葉』小論」『悲劇喜劇』pp:13-16 (2006年12月)
- [7] 武田京子「主婦こそ解放された人間像」『婦人公論』pp:52-59 (1972年4月)
- [8] 崔雪婷「井上ひさしの作品における一葉像——『頭痛肩こり樋口一葉』を中心に」『東アジア文化研究』pp:103-121 (2019年2月)
- [9] 「鉄道のまち守れ、町が駅スタッフ 神奈川・山北、無人駅化に奮起」(朝日新聞・夕刊、2012年5月26日)
- [10] 「オフィス街に白骨女性 飛び降り 上半身、盛り土に」(毎日新聞・朝刊、1983年12月24日、14版・社会)